

赤壁（袁牧）

一面の東風 百万の軍

当年 此の処 三分を定む

漢家の火徳 終に賊を焼き

地上の蛟龍 竟に雲を得たり

江水 自ら流れて 秋 渺渺

漁灯 猶ほ照らす 荻 紛紛

我 来たつて 簫を吹くの客と 共にせず

烏鵲 寒声 静夜に 聞く

一面東風百萬軍 當年此處定三分
漢家火徳終焼賊 地上蛟龍竟得雲
江水自流秋渺渺 漁燈猶照荻紛紛
我来不共吹簫客 烏鵲寒聲静夜聞

解説 長江の赤壁において起こつた曹操軍と孫権・劉備連合軍の間の戦いを述べた詩。

語釈 ※赤壁 長江の赤壁において起こつた曹操軍と孫権・劉備連合軍の間の戦いである。※一面東風 諸葛孔明が東南の風を祈禱によつて起し、孫呉軍の火攻め作戦を成功に導く。
※定三分 天下を魏、呉、蜀で三分して治める計画が定まつた。※漢家火徳 万物は土、木、金、火、水という五つの要素（五行または五徳）からなり、木は土の栄養を吸い取つて衰退させ、金は木を伐り、火は金を溶かし、水は火を消し、土は水を吸収する、というような他に打ち勝つ相互関係がある、とした。
※池上蛟龍 劉備をさす※荻 おぎ。葦の類。戦いに於いてこの荻を火攻めの材料とした。※吹簫客 蘇軾が簫を吹く客と共に遊んだことをさす。※烏鵲 かささぎの別称。

通釈 戦場一帯を東風が吹き渡り、魏・曹操の百万の軍を撃破し、天下を魏・呉・蜀に三分して治める計が確定した。火徳の相を持つ漢家、蜀漢が魏の曹操の軍を焼きつくし、池上の蛟龍といわれた劉備は火攻めにより魏・曹操の軍を焼き尽くし、雲の力を借りてついに勝利を収めたのである。そんな、古戦場、赤壁を訪れてみると長江の流れはそのまま、秋の景色が広がり、舟の漁火は岸辺に茂る荻を照らしている。私はかつて蘇東坡のように簫の笛を吹く友人をここに連れて来なかつたが、かささぎやからすが寒々となく声を静かな夜に聞くと、往時がしのばれる。